國學院大學学術情報リポジトリ

森敦文学のレファレンス機能：小説・エッセイ・年譜の相関関係：小特集図書館と書物の世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 明芳, Inoue, Akiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000456

森敦文学のレファレンス機能
—小説・エッセイ・年譜の相関関係—

井上明芳

一

図書館について、ランガナタンは言った。

一、本は利用するためのものである
二、本はすべての人のためにある。または、すべての人に本が提供されなくてはならない
三、すべての本をその読者に
四、読者の時間を節約せよ
五、図書館は成長する有機体である

図書館の五原則と言われるこのランガナタンの言葉が[1]、相当な苦労を伴って実現が目指されたことは知られているとおりであり、図書館の役割への提言となったことも文献に記されている。専門的な図書館学の領域でどのように検証され、検討されているかは不問に付すとして、図書館についてのこの五原則は、文学全般とは言わずとも、森敦文学には当てはまるように思われる。むろんそう思うことが、ただちに図書館と森敦文学を結びつける論点になり得るわけではない。

そもそも森敦文学は図書館に収蔵される近代文学ジャンルの一つであり、記録を残す習慣が起源であるとされる図書館にとっては、コレクションの一つに過ぎないであろう。だが、コレクションとして森敦文学が保存されるということは、日本語文化の〈知〉が累積されるだけではない。というのは、そのコレクションとしての性質が森敦文学自体に備わっているからである。

ランガナタンの五原則の厳密な意味は別にして、敷衍してこの原則を森敦文学に当てはめることは、一から三、五についてはそれほど難なく済ませられるようである。すなわち、森敦文学はいかなる読者も拒むことはないし、興味のある読者には『森敦全集』によって提供が可能である。したがって、森敦文学は読者のためにあると見てよいであろう。読者のためにあるということは、読まれなければ意味がないということではない。読む自由が確保されているということであり、その確保によって読者は自由に森敦文学を考えることができる。また森敦文学が成長する有機体として認められるのは、読者がいつでも新しく解釈を加え、イメージを豊富にするからである。

一から三、五の原則は当てはまるであろう。ところが四「読者の時間を節約せよ」は森敦文学にとってどういう意味になるであろうか。四つ目の原則は、いわゆるレファレンスを指し、図書館での重要な機能として、利用者の文献を探すための時間が極力短くなるよう、目的の文献を素早く提供することを意味している。そう捉えてよいならば、森敦文学にはレファレンス機能が備わっていることになる。仮定を先行させるつもりはないが、ランガナタンの図書館五原則は、森敦文学を改めて捉えるきっかけになっている。森敦文学にとってレファレンスとは一体何か。

森敦文学は、言うまでもなく森敦自身と書かれた作品から構成されている。森敦自身とは、その実在のみならず、生きてきた生涯も含む。生活したり訪れたりした場所、関係した人物など森敦年譜に記される事項は、そのすべてで森敦の生涯を網羅的に記録している。作品の執筆や発表についても記載される事項の一つである。一方、作品は作者の意図、意識に基づいて書かれたかもしれない。しかし、読者の解釈は自由であり、作者の意図、意識は読まれないかもしれない。いわゆる〈読み〉の可能性である。作品は森敦の年譜的事項を必ずしも必要としないであろう。それでも作品は森敦が書いており、その他ならなさは森敦の年譜に記載されているという事実が表している。森敦が作品を書いたこと、この年譜の記載事項は一体何を意味す

るのだろうか。

確認のため、森敦の生涯について触れておこう。[2]

森敦は明治四五年一月二二日、長崎県長崎市銀屋町に生まれる。本籍地は熊本県天草郡富岡町である。その後京城に一家で転居し、京城府公立鍾路尋常小学校を卒業、京城公立中学校に入学する。このとき文芸講演会に来ていた菊池寛、横光利一を知る。これが機縁となってのちに昭和九年二二歳のとき、横光の推輓で「酩酊船」を『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に連載することになる。その後松本に移り、さらに昭和一〇年頃、奈良に住む。このとき前田よしと娘の暘を知り、結婚の約束をする。のち瑜伽山に住み、ここを拠点に樺太に行ったり蟹工船、捕鯨船に乗ったりする。前田暘と結婚するために、実家のある山形県酒田を訪れる。

昭和一五年富岡光学機械製造所に入社し、東京市大森に転居する。昭和二〇年の終戦まで勤務する。昭和二四～二五年妻暘が入院し、義母が看護を引き受け、森敦に遍歴を勧める。山形県庄内地方の湯野浜から加茂、大山、吹浦、狩川、鶴岡や秋田県象潟まで足をのばす。昭和二六年、山形県東田川郡朝日村にある注連寺に行き、滞在する。翌二七年五月、注連寺を去り、東京に戻るが、一〇月再び鶴岡市大山を訪れ、ここを拠点に隣りの上郷村を訪れる。上郷村は横光利一が戦争末期疎開をしていたところである。

その後も遍歴は続く。大山から東京に戻るものの、昭和三〇年酒田や鶴岡周辺を再訪し、狩川、北俣村、湯野浜に滞在する。吹浦に移り、妻暘と住む。さらに吹浦から酒田へ転居する。

昭和三二年四月酒田に滞在していたが、母の治療のため三重県尾鷲に転居を計画し、熊野川の上流の電源開発株式会社北山川建設所に勤め、尾鷲連絡詰所に移り、用地係となる。奈良県吉野郡池原に滞在する。この頃ジープで尾鷲一帯を案内してもらう。尾鷲市に転居。

昭和三五年、電源開発株式会社を退職し、新潟県弥彦に転居する。昭和三七年四月には大山に再び転居する。昭和四〇年島尾正に千代田出版印刷を紹介され、東京府中に戻り、翌年調布に転居する。

昭和四四年、のちの「月山」の先駆的草稿を書くが未完に終わる。翌年一二月妻暘が入院する。昭和四八年『季刊藝術』に「月山」を発表する。翌年一月「月山」で第七〇回芥川賞を受賞する。六二歳という当時最高齢での受賞であったことや昭和九年に「酩酊船」を発表して以来およそ四〇年後に再び文壇に返り咲いたように見えたこと、「月山」の幽明界を想わせる印

象的な内容が森敦の体験に基づいていたことなどをきっかけとして、これまでの遍歴について尋ねられる機会が増えた。昭和五一年頃からは「わが人生」という演題で講演の依頼が増える。また、かつて滞在した各地を再訪する。それに基づいたエッセイもたくさん発表される。

これ以降、調布から市ヶ谷田町に転居したのを最後に、森敦の遍歴は終わり、平成元年七月二九日、その生涯を閉じた。享年七七歳であった。

以上、乱暴な略記を試みたが、これだけでも森敦が遍歴の日々を送っていたことはわかるであろう。例えば、森敦の作品を読み、この作品を書いたのはどのような人で、どのような人生を送ってきたのかといった素朴な問いから森敦を知ろうとしてまず年譜を見れば、その遍歴の人生に驚くであろう。その上で、庄内地方の吹浦、酒田、朝日村・注連寺、新潟県弥彦、三重県尾鷲などは、そのまま森敦の作品の題名に、あるいは舞台になっていることに気づくはずである。

列記すれば、題名に地名が入っている作品に「吹浦まで」（昭三一・三）、「吹浦にて」（昭和三一・六）「吹浦」（昭四〇・七）「弥彦にて」（昭和四三・四）「吹浦まで」（昭四三・七）がある。また完成には到らなかったものの、「尾鷲にて」「大山にて」「月山にて」といった草稿も残っている。[3] さらに遍歴の地を舞台にした作品としては、朝日村七五三掛地区にある注連寺に籠もった体験に基づくとされる「月山」（昭四八・七）や「天沼」（昭和四九・一）をはじめ、『鳥海山』（昭四九・五）、晩年の大作『われ逝くもののごとく』（昭六二・五）がある。とりわけこの大作は庄内平野のほぼ全域を舞台としている。尾鷲を舞台にしている作としては「天上の眺め」（昭四九・五）があげられる。さらに加えれば、遍歴先で出会った人をモデルにしていると考えられる「もくえん（杢右ヱ門）の木小屋」（昭三一・六）や「門脇守之助の生涯」（平元・三）などがある。まだまだ挙げることはできるが、このくらいに留めておこう。

したがって年譜によって、ごく単純に森敦とその文学をつなぐことが可能になり、森敦が実際に暮らし、体験したことが踏まえられて作品が書かれているという捉え方が可能になる。いわば、森敦文学の全体像を知らせるレファレンスの機能が年譜にはあることを示しており、これによって作家論的な言及もできるようになっている。

これはしかし、森敦年譜には限らない。あらゆる作家に共通して言い得ることであり、取り立てて森敦年譜にのみレファレンス機能を指摘する根拠にはならないであろう。重要なのは森

敦年譜が、実は森敦自身が書き記したり語ったりしたことによって想起が可能になる傾向がある点である。むろんすべてではないが、先に掲げた通り小説は森敦の遍歴と密接に関わっており、エッセイなどに繰り返し書いているのである。

言い換えれば、年譜と小説、エッセイには相互に相関的な関係が成立しているのである。むろん、これは小説やエッセイがそれ自体で独立して読めないということではない。ただし、森敦が自ら書き記したエッセイは年譜事項を補完し、その補完によって小説の〈読み〉が補完される。これが過言ならば、少なくとも小説から受ける印象が変わる。

さらに言い換えよう。小説は本源的に虚構を成す言説であり、一方年譜事項は森敦の実在を表す現実性、事実性の強い言説である。エッセイは言ってしまえば、その両者の境界に存在する。書かれたものであるということを見れば虚構性が強く、在ったことを描いているということを踏まえれば事実性が強いと捉えられる。が、その両者の境界に在るということ自体が、実は小説に、実は年譜に拠って捉えられるからこそであろう。つまり、三者に見出される相関関係は、相互に根拠があり、相互の証明となっているのである。

二

相互に証明となっていること、これを慎重に受けとめれば、小説、エッセイ、年譜はそれぞれをそれぞれに示唆することが見えてくる。示唆は、それぞれが相互に関係を結んでいることを明らかにし、小説の内容がエッセイあるいは年譜にも記載があることを示す。つまり、レファレンス機能であり、とすれば、この機能は相互の関係を取りもつことになるであろう。例えば、次のようである。「われ逝くもののごとく」は後半で、それまで語られてきた庄内平野を舞台とする物語に、「わたし」が再々訪し、かつて逢ったことのある人たちと出逢う場面がある。構造的な問題[4]は措いておくとして、次の引用は、どこかで読んだ覚えのある場面である。

> 路地奥のサキの家は意外なほどすぐ見つかりました。これもまったくもとのままです。しかも、だれもいないと思っていたのに、髪もおどろな女が出て来ました。腰も曲がっています。サキのががならたしかサキの逝ぎただだより十は年上だと聞きました。それにしても、こんな年寄りなは

ずはないという気がするものの、どこかにサキに似た面影が残っているようです。

「もしかして、サキのがさんじゃありませんか」

わたしが言うと女は面を上げ、険しい目つきで見返したと思うと手を振って、

「知らねえ！」

と、けんもほろろです。

「そうですか。わたしを覚えていませんか」

「お前を？　知らねえったら、知らねえ！」

わたしは逝ぎたものを追うことの愚かさを思わないではいられませんでした。

（「われ逝くものごとく」）

庄内地方の加茂地区を再々訪した「わたし」は、サキのがを覚えていて声をかける。が、がは知らないという。しかも邪険にである。「そうですか、わたしを覚えていませんか」と繰り返しても、返ってくる言葉は「知らねえ」である。これは次の引用と符合していた。

どの家からも見知らぬ人が出て来、ひょっこりと老婆が顔を見せた。髪も乱れ腰も曲がっているが、黒子がある。東敏江さんだとすぐわかった。敏江さんはお茶を教えていた。活け花を教えていた。よく山荘に来ては茶を点てたり、花を活けたりして下さった。知るほどの人は死んでしまったのに、この人がまだ生きていたのである。懐かしさに思わず声を掛けたが、知らんという邪険な声が返ってきた。なにか払うように白い蓬髪の上で手も振っている。ぼくですよ、覚えていませんか。知らん。よくお茶を点てたり、花を活けたりして下さったじゃありませんか。知らん、知らん。食事の面倒まで見て下さったじゃありませんか。知らん、知らん、知らんいうたら知らん。老婆は格子を開けて、よたよたと家の中に消えて行った。

（『月山抄』「星霜」）

ここには、かつて住んでいた奈良の瑜伽山を再訪したときのことが書かれている。「知るほどの人は死んでしまった」と思っていたが、東敏江が生きていたこと、しかし「知らん」と邪険な声が返ってくること、「ぼくですよ、覚えていませんか」と問いかけること、これらは前出の「われ逝くもののごとく」の場面と符合している。既視感に満ちていると言ってもよい。別の作品で読んだという既視感は、たんに似ているだけと言って

済ませてよいであろうか。

確かに瑜伽山は奈良にあり、「われ逝くもののごとく」は庄内平野が舞台である。しかし、この不一致はともにかつて遍歴した地を再び訪れた点で一致している。この一致がレファレンスとして作用し、関連事項が選り抜かれる。年譜には、昭和一〇年頃瑜伽山に移り住んだという記載がある。その後昭和四九年一月「月山」で芥川賞を受賞した後、自身の遍歴を尋ねられる機会が増えるとともに、かつて遍歴した地を森敦は再び訪れる。瑜伽山を訪れたのは昭和五〇年である。一方、「われ逝くもののごとく」の先の引用の舞台は庄内地方の加茂地区であり、そこには昭和二四年頃に滞在し、後昭和四九年には加茂地区だけでなく、庄内地方のかつての遍歴の地をたびたび訪れる。先の「われ逝くもののごとく」の「わたし」が再訪、再々訪することが惹起される。瑜伽山の再訪後書かれたのが「星霜」であり、それを含む『月山抄』が連載されたのが、昭和五七年六月から同五九年八月までである。庄内地方を繰り返し訪れ、「われ逝くもののごとく」の連載が開始されたのが昭和五九年三月である。つまり、この二作品は同時期に書かれているのである。

小説とエッセイとの描写の一致はささやかであっても、その一致がレファレンスとして機能し、森敦の年譜を想起させる。しかもそこには更新された情報があることに気づかされる。再び訪れたことで得たのは懐かしさだけではなかったのである。森敦自身覚えていても、相手は忘れているという事実であり、「逝ぎたものを追うことの愚かさを思わないではいられませんでした」という思いを想像してもよいであろう。それは本来虚構である「われ逝くもののごとく」では登場人物「わたし」の言葉として記される。再び訪れることにともなう感慨は、虚構である小説で実現されると捉えられよう。とすれば、実際に再び訪れた体験を語る「星霜」に直接記されなくとも、相関的な関係によって「われ逝くもののごとく」で事象の一致がなされれば、瑜伽山への再訪時の森敦の思いが想起される。

重要なのは「星霜」が『月山抄』（昭和六〇・九）の一節であるということである。『森敦全集』第六巻に収録されている『月山抄』は、森富子による解題では、全体として「わたしの遍歴」が語られているとし、単行本『月山抄』の扉裏の言葉を紹介している。

これはわたしの遍歴である。想えばわたしの生涯がすでに遍歴で、敢えてなにを目指すということはなかったが、

それでも達成すべきところがあって、到達したがごとき心地がする。

「わたしの遍歴」であるとすれば、原則的に年譜の記載順と同じ行程を辿っていることになる。しかも森敦自身の言葉によって邂逅されている。それは信用度が高くなるということではなく、実際に経験してきたことを、今度は自分の言葉で辿ることを意味する。語ることによる体験と言ってもよいであろう。ただし、かつての経験を言葉で再現するという捉え方では不足している。かつての経験の再現は言葉で行う。ということは、今書いている言葉の選択があり、その選択した言葉でかつての経験を整序するのである。厳密に言えば、過去はあったがままに再現されることはなく、選ばれた言葉によって整序され、語られた過去となって再現されるのである。あったがままに再現されることはないのだ。語られなければ過去として認識されないのである。ということは、『月山抄』の扉裏の言葉の「それでも達成すべきところがあって、到達したがごとき心地がする」とは、いわゆる人生観の表れであろう。それとともに「心地がする」のが今であるからには、自ら語ることによって人生を体験し直したという達成感の表れでもあるであろう。遍歴の人生を、言葉で語ることによって遍歴する。妙な言い方に映るかもしれないが、『月山抄』に見られる森敦の遍歴の人生は、語られることで遍歴として、実現されているのである。つまり、実際の経験があったことは認め得たとしても、語ることで経験自体が語られた経験になるのである。

こう言うこともできるであろう。記憶が記録になり、過去から未来に向けて遍歴は整序され、一つの人生を形づくる。記録であるから、一つ一つの事項として取り上げることができ、そのとき在ったこととして栞を挟むことができる。栞は歩みの跡を残す枝折りである。これは文章が一行ずつ紡がれていくことに似ている。『月山抄』には幼少期から注連寺に籠もったときまでが語られ、紆余曲折を経ながらも一つの歩みとしてまとめられている。それが可能なのは遍歴を順に語るからばかりではない。実際がそうだったとしても、遍歴を一つずつ枝折りながら、森敦が森敦の人生を書くことによって今、体験しているからである。人生を生き抜いたというよりは、その人生が作られたのである。同一の、ただし別の仕方で。

別な言い方をすれば、一つ一つの経験が、出来事として集成される。経験は確かに言葉ではなかったが、出来事は言葉であり、それらが一つにまとまり遍歴となるならば、ここにコレク

ションの性質を捉えることはできるであろう。先に森敦文学にコレクションの性質を指摘した所以である。

さらに重要なことが指摘できる。「わたしの遍歴」が語られている書名が『月山抄』であるということである。先の略記した年譜からもわかるとおり、「月山」発表以降、遍歴はない。ということは、「月山」発表までが遍歴期と捉えられ、それが「月山」を完成し発表することで熄むのであれば、「月山」は遍歴の終着点として捉えられる。とすれば、遍歴自体に「月山」が書かれる要因としての意味を捉えることはできるであろう。しかも「月山」以降の年譜事項を踏まえれば、この終着点は「月山」以前と以降を分ける年譜上の分岐点ともなっている。遍歴途上に書かれる作品がたびたび書き換えられ、「月山」発表以降に完成されること、また、「月山」発表以降は、それまでの遍歴について語り、それに基づいてエッセイを書き、小説を書いていること、これらは「月山」が分岐点である証左である。つまり、『月山抄』は「月山」を年譜上の分岐点として措定しているのであり、そこに到るまでの体験を「遍歴」として辿り直しているのである。それは整序であり、文章という一つの線条的な発現であると言えよう。遍歴の体験の一つの可能性であり、一つの顕れである。しかもエッセイには具体的な年月がほぼ記されない。ということはこの体験自体が時系列に沿って行われるのではなく、出来事として行われることは言を俟たない。具体的な年月は年譜によって確かめられるのみである。だからこそ、文字通り「抄」なのであり、それは書くことによって実現されるのである。

語られる事項が、年譜のそれと一致し、確認される。とすれば、エッセイは年譜の記載事項の内容の根拠になり、年譜はエッセイの内容に具体的な年月を時系列に沿って与え、かつて実際に在ったという根拠になる。先述した「われ逝くもののごとく」の記述がエッセイとの関係に見出されたことを思い出せば、ここに三者の相関関係は見やすいであろう。

根拠が相互に求められ、相互に証左となるこの相関関係は次のことを開示してくる。すなわち、森敦が森敦自身の言葉によって捉えられるということである。だから「われ逝くもののごとく」の前掲の場面は、エッセイに確かに語られていたという既視感があったのである。似ているだけという判断をないがしろにできなかったのは、森敦が森敦自身の言葉によって捉えられていたからなのである。

三

かと言って、小説に森敦の実人生上の体験が正確に描かれているとは限らないが、エッセイにも必ずしも実人生上の体験が正確に語られているわけではない。例えば、注連寺に籠もった体験である。これに基づいて「月山」は書かれたとされる。「月山」には、寺のじさまが一人で寺を守っていると描かれる。それはエッセイも同様である。

浪々の末、ぼくは月山の山ふところなる朝日村――当時は東村といった――大網七五三掛の注連寺に辿りついた。注連寺は湯殿山口真言四ヵ寺のひとつで、伽藍はかつての繁栄を思わす雄大な結構をみせていたが、雪崩に傾いて荒廃しきっていた。また、伽藍に接続して大きな二階建の庫裡があった。しかし、これも伽藍の傾きに押されて、傾いていたばかりではない。天井板もなく、床も板敷きのまま畳もない。間仕切りらしいものはあるものの、襖もなければ障子もない。しかも、寺には寺守りの門脇というじさまがひとりいるきりである。（「人間の生涯」昭和五七・五）

この記述に基づき現地調査[5]を行った結果はしかし、違った。寺のじさまの名は確かに門脇守之助であった。妻久和とふたりで住んでいたのはなかった。が、一人で住んでいたのである。が、このエッセイはそれに触れることなく、門脇守之助は一人で寺を守っていたとされる。むしろこれは「月山」の寺守のじさまである。しかも「月山」では「わたし」は庫裡に一人で祈禱簿で作った蚊帳を吊って暮らしていたことになっているが、実は隣に渡部良策も住んでいたのである。つまり、エッセイは必ずしも実際の経験がそのままに描かれているとは限らないのである。その意味でエッセイは虚構性を有している。とすると、エッセイを相関的に内容の根拠とする年譜自体が、虚構化すると捉えられる。「月山」もエッセイも年譜も虚構であるということ、ここに森敦が森敦自身の言葉によって捉えられるという意味を捉えられよう。

見方を換えれば、森敦の小説もエッセイも年譜も、その範疇である限りはすべてが事実であり、疑いを差し挟む余地はない。したがって、虚構とか実際とかといった問題も生じることはなく、小説がエッセイを、エッセイが年譜を、年譜が小説をといった相関的な関係を指し示すレファレンスの機能が十分に発揮さ

れる。だが、ひとたび森敦の記した内容に従って、実際に調査をすれば、すべてではないにしても、その内容それ自体が虚構であったことが明かされる。いわば虚構／実際といった対偶的な論理が生じるのである。したがって、レファレンス機能がこの論理を見出させると言い得よう。

この論理はむろん、実際に対応することで生じているから、虚構はたんに虚構であることを理由にして成立しているのでない。これは実際に森敦が遍歴し、それを材にエッセイを語り、小説を書いたことと通底している。これらは実際の経験に基づいて出来事化していた。この方法の完成を「月山」の執筆に見ることができる。

「月山」は、発表された完成稿と草稿を合わせてぜんぶで六種類の自筆原稿が残されている。[6] 概括すれば、『季刊藝術』に掲載された初出にあたる自筆原稿がある。これによって芥川賞を受賞した。受賞後『文藝春秋』に再掲されるにあたり、『季刊藝術』が複写され、それに大幅な加筆訂正が加えられている。単行本になった本文はこれである。構造的な問題は言及の余地を残すものの、両者とも文体は「です・ます体」が用いられ、舞台は七五三掛地区の注連寺である。先の略年譜通り、森敦が滞在し一冬を過ごした寺であり、この体験に基づいて書かれたとされる。一方で『森敦全集』第三巻に収録された草稿がある。唯一「である体」が採用された草稿である。書き出しに芭蕉の「雲の峰いくつ崩て月の山」の句が引かれてはじまるが、未完に終わっている。舞台は大山地区であり、ここから注連寺を想起させる寺を思うという設定である。この草稿と書き出しは同じようでありながら、「です・ます体」が採用され、舞台も注連寺がとられており、初出の自筆原稿に近い草稿がさらにある。残りの二つについては、尾鷲からジープに乗って移動していくうちに七五三掛に入るという設定の草稿がある。文体は「です・ます」体である。尾鷲もまた、森敦の遍歴の地である。最後に「月山」に登場する寺守のじさまや源助のじさまについて集中的に書き直された草稿がある。

これら六種類に見られる生成過程は、自らの遍歴の体験を作品に取り入れる森敦の試行錯誤について開示している。まず気がつくのは、「月山」は最初から七五三掛地区の注連寺が舞台にはなっていなかったことである。尾鷲から七五三掛へという設定や大山から想起するといった設定には、七五三掛地区の注連寺を外から描こうとする指向性を捉えることができる。だが、この二つの草稿は完成されることはなかった。理由は様々考え得るが、一つ挙げるとすれば、どこか〈から〉という指向性[7]で

あったからであろう。尾鷲も大山も遍歴の地であり、それはそれで出来事化が可能な地である。そこから七五三掛という別の出来事の地へという指向性は、この地を舞台とするという点でひとつの地が選べないことになる。むろん、これは推測に過ぎない。興味深いのは、それでもなお、単行本になった本文が次のような語り出しになっていることである。

　　ながく庄内平野を転々としながらも、わたしはその裏ともいうべき肘折の渓谷にわけ入るまで、月山がなぜ月の山と呼ばれるかを知りませんでした。

「月山」は七五三掛地区の注連寺を舞台としているにもかかわらず、まず肘折という外が裏として語られている。つまり、外を要するという指向性は草稿の段階から模索されてきていたと捉えられるであろう。しかも「裏ともいうべき」という語り方は示唆的である。[8] 裏は「べき」と想定して、裏となることに気づくからである。さらに裏があれば、論理上、表を想定することが可能になる。裏があって表があるならば、その両者の間には境界が生じている。裏／表である。地理的に見れば、月山を境界にして肘折と七五三掛はほぼ等距離に位置している。裏と表は地理的にも成立する。同時に月山を境界として措定することも可能になる。肘折もまた森敦が訪れたところである。遍歴の地を取り込み、月山を境界とし、肘折を裏と想定することで、七五三掛を表とすることができる。〈から〉では境界が生じなかったのである。境界が生じないということは、たとえ二つの地を描いても、内／外、裏／表のようにはならず、二地のままなのである。理論的抽象度が高まっていないと言えようか。

　別な見方をすれば、〈から〉という指向性は「ながく庄内平野を転々としながらも」という表現に集約され、直後に境界を生じる裏として策定される。つまり〈から〉の論理が裏／表の論理へと一気に置き換わったのである。

　確かに森敦の七五三掛地区注連寺に滞在したことは体験した実際である。ということは、これを「月山」という小説に取り入れることは、単純に実際／虚構という論理構造を形成することと同じである。実際を語ることは、線条的に並ぶ言葉に置換することであり、本来どこまでも相容れるはずはないであろう。とすれば、虚構の成立は、実際との相関的な関係を作り上げることを意味するのであって、「月山」がその構造として裏／表を有することではじめて実際が虚構として語り得ることになるのである。「月山」を読んで森敦を想起してしまうのは、その

論理が「月山」自体に備わっているからである。

「月山」の生成過程は〈から〉の論理でまず試みられた。はじめから「月山」が裏／表の論理で書かれていたのではないのである。いわば「月山」の生成過程は、森敦の実際／虚構の論理の模索であり、この作品の執筆によって獲得されたと言えよう。それが森敦が森敦自身を語ることを可能にする論理にもなったのである。「月山」が年譜の終着点であり分岐点であるゆえんがここにある。この二点は同一でありながら、意味を違えている。終着であったのは「月山」発表が遍歴の終わりを示すからであるが、それは実際／虚構の論理がいまだ成立しない状態を示している。それが実際／虚構の論理を内在する「月山」の成立によって分岐され、遍歴の虚構化が可能になったのである。つまり、七五三掛地区の注連寺滞在を虚構化した「月山」の成立と、森敦自身が自らの遍歴をエッセイで語ることとは、同一の理論であったことが見出せるのである。

わたしは注連寺に夏から上がり、豪雪の冬を過ごして夏帰った。「月山」はそれをほとんどそのまま書いたのだが、（中略）雪はまだ境内の到るところにあったが、暖かい日がつづくようになった。もう和紙の蚊帳はいらないのである。和紙の蚊帳をはずすと、和紙の蚊帳にたまった雪埃が煙のように立った。わたしが開けられた玉手箱から立ち昇った、煙を思いだしたのは言うまでもない。屋根裏で冬眠していた昆虫たちが飛び立って行く。わたしもわたしであることから脱けだして、飛び立たねばならぬと気はせいたが、踏ん切りがつかぬ。そこへ、思いも寄らず友人が迎えに来てくれた。わたしは謂わゆる来迎思想なるものを思い浮かべた。事実、「月山」をそのように荘厳して、幽遠のうちに終わらそうとも考えたが、思い止まった。ただ会ってなんのことなく別れた人が、実は神であり仏であったといった話がいくらでもあるではないか。（「幽明」『月山抄』）

既視感に満ちるだろうか。「月山」の最終部を要約したようなこの内容は、理論から来迎思想へ移ることを拒絶している。「月山」は出羽三山信仰とか擬死体験とかたぶんに宗教イメージを喚起しつつも、それだけではついに印象に終わってしまうのは、裏／表、実際／虚構の理論があるからである。

四

この捉え方については、すでに森敦文学のレファレンス機能が「意味の変容」に描かれる理論として明確に挙げている。確かに「月山」の表現に即した分析に基づいた〈読み〉から導かれた理論ではある。しかし、その結果は、森敦文学に内在している理論それ自体の具現化にもなっているのである。その理論とはこうである。

任意の一点を中心とし、任意の半径を以て円周を描く。そうすると、円周を境界として、全体概念は二つの領域に分かたれる。境界はこの二つの領域のいずれかに属さねばならぬ。このとき、境界がそれに属せざるところの領域を内部といい、境界がそれに属するところの領域を外部という。

したがって、次のようになる。

内部＋境界＋外部で、全体概念をなすことは言うまでもない。しかし、内部は境界がそれに属せざる領域だから、無辺際の領域として、これも全体概念をなす。したがって、内部＋境界＋外部がなすところの全体概念を、おなじ全体概念をなすところの内部に、実現することができる。

「月山」に当てはめてみれば、裏「とも言うべき」肘折を外部とすれば、月山は境界になり、したがって七五三掛は内部となる。このとき、境界は外部に属するため、月山自体は肘折に属することになる。だから、「月山」の物語内容では、月山は遠く臨むだけで直接登場することはない。物語の舞台である七五三掛は無辺際であり、それで全体概念をなすことになる。題名が外部に属する境界「月山」であるのは、物語を内部にするという指向性を持っていると捉えられる。

さらに考察をすすめれば、「月山」が外部に属する境界であるということは、小説／外部という理論を成立させることになるであろう。この場合外部は、エッセイ、年譜を指すと考えることができる。「月山」／エッセイ、年譜で全体概念をなすのだから、つまり森敦文学の把握が可能になるのである。「意味の変容」の別な表現を挙げれば「コップとコップ以外といえば全世界になる」ということである。つまり、作中で実現している裏／表も、そこから導かれる実際／虚構もすべて外部／内部

の理論に収斂するのである。ということは、「意味の変容」は森敦文学全体を統御する理論であると捉えられよう。この「意味の変容」の成立もまた、小説、エッセイと同様である。いわば、森敦の生涯を貫く理論なのである。

「意味の変容」は五章から成っている。「寓話の実現」「死者の眼」「宇宙の樹」「アルカディヤ」「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」である。その最初は「近代工場Ⅰ・Ⅱ」であり、昭和三〇年に「実現」に発表される。森敦が吹浦にいたときである。その後繰り返し改稿され、「群像」に昭和四九年から五九年に断続的に連載され、単行本として昭和五九年に刊行された。[9] この年は先に見た『月山抄』の連載終了時であり、「われ逝くもののごとく」の連載開始でもある。見方を換えれば、先に見た「月山」の終着点、分岐点を超え、「月山」も「われ逝くもののごとく」も『鳥海山』もこの理論の実現が試行され、それぞれの作品の試行がこの理論を先鋭化していくのである。

興味深いのは、単行本『意味の変容』（昭五九・九）に書かれている森敦の言葉である。

「意味の変容」は、「月山」「鳥海山」に書かれずにいた、わたしの生涯というべきものを書き綴ったものである。

（「意味の変容　覚書」）

これに導かれて年譜を見れば、「意味の変容」には森敦の職歴とでも言うべき事項が描かれている。[10] 富岡光学機械製造所での光学レンズ制作の体験、電源開発株式会社でのダム建築の体験、近代印刷での印刷業の体験がそれぞれ活かされ、リアリズム一・二五倍や内部＋境界＋外部、近傍／域外などの理論が抽出されている。これは先述したように、遍歴をエッセイや小説に取り入れたことと通底している。つまり、エッセイや小説が遍歴と相関的な関係を有していたように、「意味の変容」も職歴と相関的な関係を有しているのである。生涯がエッセイに、小説に、理論に読まれ、エッセイも小説も理論も生涯を喚起する。これが森敦文学であるならば、森敦はこの相関関係に存在していると言えるであろう。

そこには確かに七七年間生きた実際の森敦はもういない。だが、森敦文学はその文学、理論によって森敦の生涯を喚起し続ける。いわば、森敦はそこに生きていると言ってよいであろう。あるいは文学史的言論を装えば、実生活上の森敦はいないが、自らの文学によって存在し続けると言えるであろう。第二の「私」と言えばよかったであろうか。

いないということを外部とみれば、森敦文学は内部となる。実際の森敦／森敦文学は当然相関関係を形成し、作品を読めば森敦を思い起こし、森敦を知れば小説、エッセイに書かれている内容を思い出す。ただし、森敦とは年譜に記載された事項による把握であり、実際の森敦ではない。その年譜さえ虚構性を有していた。くどくなるが、すべては森敦文学として封じられ、封じられるからこそその封じた主がいないのだ。いや、これも「意味の変容」に絡め取られる捉え方であるならば、言葉を換えよう。図書館に文芸的〈知〉として収蔵される森敦文学は、森敦の言葉で内在的に森敦を収蔵する。その文学の言葉はレファレンス機能として作動し、森敦を示唆する。森敦としての「私」がここに在ると。ここに図書館としての空間の機能があるのである。

注

（1）竹内悊『図書館の歩む道―ランガナタン博士の五法則に学ぶ』（平二二・五、日本図書館協会）などを参照した。

（2）筑摩書房版『森敦全集』別巻所収の年譜（森富子作成）を参照した。

（3）詳細については、森敦の原稿をはじめとする自筆資料について調査した結果を『森敦資料目録』（科学研究費基盤研究(C)課題番号：25370228による研究成果報告書）にまとめてあるので、参照いただきたい。本論の言及はこれに基づいている。

（4）「われ逝くもののごとく」の構造についての論究として、中村三春「森敦『われ逝くもののごとく』の構造」（「山形大学紀要」平二〇・二）、中村三春「方法としての〈わたし〉―森敦『われ逝くもののごとく』における語りの位相」（「北海道大学紀要」平二九・七）、山本美紀「森敦「月山」と「われ逝くもののごとく」試論 ― 「意味の変容」の理論による把捉」（「解釈」平二七・一）、井上明芳「森敦「われ逝くもののごとく」の特性―物語を語り、体験する」（「解釈」平三〇・一）などがある。また本論中で触れる「わたし」については、山本美紀「森敦「われ逝くもののごとく」論― 発現するわたしと時間」（「日本文学論究」平二七・三）がある。

（5）『森敦「月山」総合的研究』（科学研究費基盤研究(C)課題番号：25370228による研究成果報告書）に調査結果を収録しているので、参照いただきたい。本論はこの結果に基づいている。

（6）「月山」の自筆資料については、調査の上、すべて翻刻し、その成果を『森敦「月山」総合的研究』（科学研究費基盤研究(C)課題番号：25370228による研究成果報告書）に収録した。詳細は本書を参照いただきたい。

（7）この指向性は、むしろ『鳥海山』に見ることができる。その点については井上明芳「森敦「鳥海山」論―読みがたさの生成」（「解釈」平二九・一）で論じている。

（8）この点に着眼した論として井上明芳「〈境界〉化するテクスト」（『文学表象論・序説』翰林書房、平二三・二）を参照いただきたい。

（9）「意味の変容」は本論で述べたとおり、五章から成っており、それぞれが成立過程を有している。以下に章に従って「群像」掲載までの過程を記す。

「寓話の実現」は、順に「深夜の呼び声」（「実現」昭三一・一二）、「壮麗について」（「立像」昭四〇・六）、「歓喜について」（「立像」昭四〇・一一）、「寓話の実現」（「群像」昭和四九・一〇）である。

「死者の眼」は、順に「近代工場Ⅰ」（「実現」昭三〇・八）、「近代工場Ⅱ」（「実現」昭三〇・九）、「近代工場」（「立像」昭三九・一一）、「死者の眼」（「ポリタイア」昭四五・一一）、「死者の眼」（「群像」昭四九・一一）である。

「宇宙の樹」は、順に「掻痒について」（「立像」四一・五）、「宇宙の樹」（「ポリタイア」昭四六・一一）、「宇宙の樹」（「群像」昭四九・一二）である。

「アルカディヤ」は、「群像」（昭五〇・一）で初めて書かれる。

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」は、順に「恍惚について」（「立像」昭四二・二）、「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」（「群像」昭五九・九）である。

以上の成立過程から、森敦の生涯をほぼ貫いて思索が持続されていたことがわかるであろう。

(10) この点に着眼して「意味の変容」を論じている論として、山本美紀「森敦『意味の変容』論―展開される／要請される理論」（「解釈」平二九・一）がある。

付記―本論は、科学研究費基盤研究(C)「自筆資料調査および実地踏査による森敦文学の総合的研究」（課題番号：16K02417）の成果の一部である。